

# 2023 年度 外部評価委員会 実施報告書

## 1. 外部評価委員会を終えて

「創価大学自己点検・評価実施規程」第 12 条第 3 項に基づき、本学の自己点検・評価活動の客観性、公平性を担保するため、外部評価を実施しました。

全学的な取り組みを対象としたこの外部評価を本学は 2020 年度より毎年開催しております。2023 年度外部評価は、前年度にあたる 2022 年度に外部評価委員よりご指摘いただいた点を踏まえて本学が取り組んだ事項を中心に、回答する形式で報告書をまとめ、併せて 2022 年度の本学における主な取り組みについても報告し、各委員から評価いただく方針としました。具体的には、教育・研究・SDGs・ダイバーシティ・経営基盤の構築、の 5 つの分野で報告内容を構成し、委員会では、鈴木学長から本学の取り組みについて説明したのち、質疑応答を行い、活発な意見交換を行うことができました。

また、評価報告書では、本学の長所・特色、課題など多くの提言をいただき、改善・向上の取り組みに向けた重要な視点を得ることができました。次頁より外部評価委員からの提言概要を紹介します。

近年、国家間・民族間の分断の力を目の当たりにする中、青少年の可能性を開き平和な未来を実現する教育としての「創価教育」を実践していくことが、今こそ必要であり、人間教育の世界的拠点としての役割を果たす本学の使命の重要性を再確認しました。外部評価委員より頂いた評価結果を活用し、「Soka University Grand Design 2021-2030」に示した「価値創造を実践する『世界市民』を育む大学」を目指して、ますます教育・研究改革に取り組んでいく所存です。

最後になりましたが、ご多忙の中、本学の外部評価委員をお務めいただいた委員の皆様、改めて感謝申し上げ、あいさつとさせていただきます。

2023 年 10 月  
創価大学 副学長  
全学自己点検・評価委員会 委員長  
西浦 昭雄

## 2. 外部評価委員からの提言概要

### (1) 教育

#### ①長所・特色とされた事項

##### ○データサイエンスやSDGsなど文理横断した教育施策の進展

- ・ データサイエンスとSDGs教育の向上に力を入れている。高大接続の一環として創価高校・関西創価高校の学生を対象に行った「データサイエンス入門」が約9割の修了率ということは素晴らしい結果であるとともに、修了できなかった学生にもサポートを提供している。また、通信教育部でもデータサイエンス教育が必修科目として開講が準備されており、デジタル社会を見据えた取り組みである。さらに、SDGsに関する専門科目を学べる副専攻制度も導入し、学生に多様な学習機会が提供されており、これらの取り組みが高く評価される。

##### ○多様な学生に応じた学習支援

- ・ 学習支援にDXを活用し、機能の利用率や成績推移などを注視しながら学びのつまずき対策に本格的に取り組もうとする姿勢は高く評価できる。要支援学生へのサポートにもアドバイザー教員、障害学生支援室、授業担当教員で情報を共有しながら組織的な支援に取り組んでおり、さらなる強化が期待される。
- ・ アドバイザー教員との面談による学習支援や、科目担当教員との情報連携、スチューデント・アシスタントの拡充やキャンパス・ソーシャルワーカーの手配など学生中心の教育体制が整備されている。

##### ○探求型学習支援を通じた高大接続

- ・ 貴学の特色・教育内容が十分に高校教員へ伝わっていない、という分析結果から2022年度には、「金融教育」、「SDGs(ESG)に焦点を当てたアントレプレナーシップ教育」、「働き方改革」の3つのテーマに関する教材が開発され、「そうか!」という探究支援プログラムとしてリリースされるという高大接続強化策に繋がっていることは非常に重要かつ意義のある取り組みと考える。
- ・ 中高一環教育は貴学の大きな特徴でもあるので、創価学園から推薦で大学に進学する高校生に対して、探求型学習から始まり、研究分野に強みを持たせる取り組みとなることが期待される。

## ②課題とされた事項

### ○これまで培ったオンライン、リモート教育の再構築

- ・ 貴学ではデータサイエンス教育において動画コンテンツの活用が進んでいるが、2023年に文科省から発表された「大学・高専における遠隔教育の実施に関するガイドラインについて」では双方向性と即応性が重要視されている。これまでの対面と遠隔の教育方法だけでなく、同期と非同期の組み合わせも考慮する必要がある。通信教育のパイオニアである創価大学も、遠隔教育を進化させるために現状の「遠隔で非同期」というスキームの転換を検討していただきたい。

### ○志願者層への「本学ならではの学び」の発信

- ・ グローバル、データサイエンス、SDGsに焦点を当てた教育は高く評価されるものであるが、これらの内容を外部に発信する方法が課題である。付属や系列校以外との高大連携教育や、未来の志願者である中等教育機関の生徒に大学独自の教育魅力を伝える必要がある。

## (2) 研究

### ①長所・特色とされた事項

#### ○重点研究の推進

- ・ 糖鎖生命システム融合研究所による文部科学省「大規模学術フロンティア促進事業」として本格始動した「ヒューマン glycome プロジェクト (Human Glycome Atlas Project : HGA)」など研究上の充実は評価できる。
- ・ 創価大学重点研究推進プロジェクトの新設や国内外の研究機関との連携強化の取り組み等を進めており、プランクトン工学研究所や糖鎖生命システム融合研究所の研究環境整備を含め、今後の研究活動の進展と成果に期待している。

## ②課題とされた事項

### ○社会人も含めた大学院志願者確保

- ・ 大学院への志願者確保は緊急の課題である。特に社会人の学び直しにおいては、取得できる資格の拡充に加えて、社会人向け修士プログラムや都心部にサテライトキャンパスを設置することも検討課題として挙げられる。

### ○社会課題への貢献を通じた研究カブランドの構築

- ・ 生物多様性の保全は重要な課題で、COP15でネイチャーポジティブ目標が採択された。また国内では環境省が「生物多様性のための30by30アライアンス」を立ち上げるなどの動きがある。これらの他にも同様の取り組みにおいて、プランクトン工学等で培われた研究シーズが活かされる機会やネットワークを拡大していくことが期待される。

- ・ 創価大学は「平和」や「環境」に関する研究分野で強みを持ち、独自の実績がある。特定の研究分野に焦点を当て、存在感を示すことで、海外から研究者や学生を呼び込み、国際的な研究拠点の構築につながるのではないかと。

### (3) SDGs

#### ①長所・特色とされた事項

##### ○全学的な SDGs 施策の具体的推進

- ・ 「学内 SDGs プロジェクト」、「創価大学 SDGs グッドプラクティス制度」、「SDGs 達成に貢献する人材育成とネットワーク構築」など、SDGs を学内に浸透させる工夫が見られる。是非、このような取り組みを継続して、学内ベンチャー制度などによって起業家精神を育んだ人材を社会に輩出頂きたい。
- ・ SDGs 副専攻の設置やシラバスに SDGs との関連を明記するなど、関心のある学生だけでなく、全学を巻き込んでいく取り組みとなっており、高く評価される。

##### ○地域および国際機関との連携事業

- ・ 大学コンソーシアム八王子主催の学生企画補助金に採択されるなど、学生による素晴らしい実績を残している。特に、理工学部の丸田ゼミによるバイオプラスチック事業は高い完成度を示し、これを自立的なプロジェクトとして推進し、社会に貢献できる人材を育成する取り組みが進めていただきたい。
- ・ UNHCR との連携などは非常に高く評価される取り組みである。さらに、学生を主体として地域の初等中等教育機関や企業なども巻き込んだ取り組みによって、これまでにない産官学連携の新しい可能性を探っていただきたい。

#### ②課題とされた事項

##### ○産官学連携への参画等を通じた社会への発信

- ・ 気候変動への対応に関して、IPCC 第 6 次報告書では、2050 年までに消費者の変化により建物、陸上輸送、食品部門からの温室効果ガス排出量を 40～70%削減できる可能性が示された。また、国内においては経産省が産官学のサーキュラーエコノミー・パートナーシップを立ち上げることを公表している。創価大学は、気候非常事態宣言を公表しており、気候変動に関して積極的に取り組み、社会に対策を発信する役割を果たすことが求められる。

#### (4) ダイバーシティ

##### ①長所・特色とされた事項

###### ○高い国際性

- ・ 世界市民教育や交換留学、SGU 等を通じた国際化という意味での DEI (Diversity Equity Inclusion) の取組みは、他校を一步も二歩もリードしており、多様な価値観を受け入れる土壌はすでにあると思われる。

##### ②課題とされた事項

###### ○教職員における女性比率の向上

- ・ 女性職員の登用についての着実な取組みは評価されるが、目標数値については全国の女性雇用者比率や、国大協データとも比較して見直す必要があると考える。その上で、ダイバーシティ政策としては、外国人職員や障がい者も視野に入れたものに進化すべきである。

#### (5) 経営基盤の構築

##### ①長所・特色とされた事項

###### ○資産運用や寄付金などによる収入の多様化

- ・ 大学の入学者数が減少している中、資金運用の成功など財務体質の改善が進行しており、施設設備の整備計画も進展している。
- ・ 寄付戦略や資産運用において、グリーンボンドやインパクト投資、環境認証を取得するなど SDGs への注力が評価され、他大学の範となる成果を上げている。

###### ○サステナブルキャンパスの検討着手

- ・ 大学がサステナビリティに向けた取組みを行い、脱炭素に向けたロードマップの策定に着手するなど、昨年度の課題に迅速で着実な対応がされており、高く評価できる。また、学生の受け入れを一層推進する「多様なキャンパス」を実現する計画も賞賛される。
- ・ 八王子の自然環境を活かし、森林などを CO2 吸収源としてクレジット登録することや、インターナル・カーボンプライシング制度による環境投資判断基準の明確化、さらには自然と共生するキャンパスとして OECM 登録すること等にも取り組むことで脱炭素だけでなく生物多様性の保全からもサステナブルキャンパスとしての価値に繋がる可能性がある。

## ②課題とされた事項

### ○多様な入学者確保に向けた取り組み

- ・ 大学の収容定員充足率の管理は今後「収容定員充足率」が求められるので、中途退学の抑制と編入学の受け入れを考慮した学費政策や、多様な奨学金政策を策定し、長期的な経営基盤に基づく教育研究の充実を期待している。また、施設のライフサイクルコストとデューデリジェンスに基づいた資産価値の低減を防ぐ計画を策定し、実行する必要がある。
- ・ 充実した教育が行われているにも関わらず、その大学の魅力が外部に適切に伝えられていない可能性がある。多様な人材を集めるためには、付属や系列校以外への情報発信や高大連携を積極的に行い、大学の理念と価値を保ちつつ、新たな受験生や保護者にアピールする方法を真剣に考える必要がある。

## 3. 外部評価委員からの講評

- ・ 大学にとって今、大きな転機を迎えおり、「学生の支援」を重視してきた大学が力を発揮しなければならない時であると思う。創価大学はこれまで多様な学生を受け入れ、教育プログラムの提供に積極的に取り組んでおり、ダイバーシティとインクルージョンに関するバックグラウンドを持っている。少子化、DX、グローバル化、産業と職業の変化など、高等教育の状況が変化しているなか、中長期的には「改善」のみでなく、教育内容、教育方法、教育評価、学生支援も含めた構造的な「再構築」を進め、リーディング私学としてさらなる発展を期待する。
- ・ 2023年度の外部評価委員会に向けて、昨年度の指摘を考慮して、大学が取り組んだ事項に焦点を当て、改善への強い意欲が示されている。志願者確保に課題がありつつも、大学の強みを活かし、協力し、新たな展望を築くために取り組む準備が進行中である。学生、教員、職員の協力と伝統のもと、困難を乗り越えていく力強い姿勢がある。
- ・ 外部評価委員会を通じて、大学は透明性と健全性を高める仕組みを実現しており、厳しい状況に対応しながら学生主体の大学運営に取り組んでいる。大学のスポーツ活動、特に駅伝部や野球部の活躍が大学のブランドイメージに大きく貢献しており、学生の姿勢は大学の魅力の一つである。少子化に対抗するためには、海外留学生や社会人の受け入れが必要であり、大学の「世界市民」教育へのコミットメントを強化し、海外事務所との連携をさらに重要視すべきと考える。

- 創価大学は一言でいえば「玄人受け」する大学ということになるだろうか。少子化のスピードが高まる中で新たな層にもアピールするには、多くのステークホルダーにも分かりやすい大学のブランドストーリーが必要と考える。そのためにも大学時代から活躍してきた方々をもっともっと掘り起こし、多角的な価値がある創価大学ブランドを構築し、社会に発信して頂きたい。
- 毎回新たな取り組みに挑戦し、学生を価値ある人材として社会に輩出することを重要視している。外部評価委員として創価大学の取り組みを見て、学生の学びを重視する熱心な教育環境に身を置くことのできる学生は幸せだと感じた。大学の価値は学生の育成によって測られるべきであると再確認させていただいた。